ハムレット

——デンマークの王子ハムレットの悲劇——

三神　勲　訳

世界文学全集 1　シェイクスピア

© 1969

編集委員
阿部知二　伊藤　整
桑原武夫　手塚富雄
中島健蔵

昭和35年3月25日　初版発行
昭和44年11月20日　34版発行

定価　430円

訳　　者　中野好夫
　　三神　勲
発 行 者　中島隆之
印 刷 者　中内佐光
装　　幀　原　　弘

印　刷・暁印刷株式会社
製　本・美行製本株式会社

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京（292）大代表 3711
振替口座　東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
0397－310101－0961

目　次

ハムレット……一
リヤ王……一四五
マクベス……二六五
ロミオとジュリエット……三五一
訳注……四七七
年譜……四九七
戯曲創作年代……五〇〇
解説……（訳者）五〇三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

第一幕

第一場

*真夜中。空に星が冷たくきらめいている。エルシノアのデンマーク王宮のゴシック式の城は、ほの暗い空に黒く不吉な影を投げている。城の城壁上の狭い通路、左右に城楼へ通じる戸口が見える。いかめしく武装した歩哨のフランシスコーが前後に歩いている。時おり、闇の中をうかがう。小脇にかかえた矛の先が無気味にきらめく。しばらくして、同じように武装したバナードー、一方の城楼の入口から現われる。おそろしそうに闇の中をすかして見る。突然、フランシスコーの足音を聞きつけて、思わず大声で誰何する。

バナードー　こらっ、誰か？

フランシスコー　（急に振り返って）なに、きさまこそ誰か？　止まれ、名のれ。

バナードー　（合言葉で）陛下万歳！

フランシスコー　バナードーか？

バナードー　そうだ。

フランシスコー　（ほっとしたように）時刻どおりよく来てくれたな。

バナードー　もう十二時だ。さあ、帰って休め、フランシスコー。

フランシスコー　交替か、ありがたい。やけに寒いや、それに、なんだか気分がよくない。

バナードー　（鋭く）異状はなかったか？

フランシスコー　小ねずみ一匹姿も見せなかった。

バナードー　じゃ、ゆっくり休め。（行きかけるフランシスコーの背後から）それからな、ホレーショとマーセラスに会ったら、今夜の歩哨の仲間だ、急げと伝えてくれ。

フランシスコー　（足音を聞きつけて）来おったらしいぞ。こらっ、止まれ、誰か？

ハムレットの友人、学者のホレーショと軍人マーセラス現われる。フランシスコーの誰何に、いずれも合言葉で答える。

ホレーショ　この国の味方。

マーセラス　デンマーク王の臣下。

フランシスコー　おやすみ。

マーセラス　やあ、ご苦労、ご苦労。

誰と交替したのか？
フランシスコー　バナードーだ。　（フランシスコー退場）
　ではおやすみ。
マーセラス　おうい、バナードー！　おうい。
バナードー　どうした、ホレーショ君も来たか？
ホレーショ　（冗談に）ここに震えておるよ。
バナードー　（近づいて、ホレーショの手を握り）
　よく来てくれましたな。ご苦労だな、マーセラス。
ホレーショ　（からかうように）どうでした、やっこさん
　今夜も現われましたか？
バナードー　（真顔で）いや、まだ姿を見せません。
マーセラス　そんなものは妄想にすぎん、とホレーショ
　君は断定なさるのだ。
　信ずる余地はまったくない、と申されるのだ、
　わしたちが二度まで見たあのおそろしい姿をな。
　で、ともかくこうしてここへお連れしたのだ。
　一と晩じゅう歩哨に立っていれば、きっとまた
　現われるにちがいないからな。まあ、なっとくのいくまで
　見ていただこう、言葉をかけてもらおうではないか。
ホレーショ　ばかばかしい、まず出ないね。
バナードー　まあ、ちょっとおすわりなさい。
　ここでもう一度、貴君の耳に攻撃をかけますぞ。
　要塞堅固に、あくまでわしらの話を受けつけようとなさらんが、
　二た晩もつづけてこの眼でしかと見とどけたのだし。
ホレーショ　では、すわって
　一つバナードー君からあらためてうかがいましょうかね。
　（三人車座にすわり、バナードーが話しだす）
バナードー　つい昨夜のことでした。
　北斗星の西寄りのあの星が、そら、
　ちょうど今光っている辺まで来た時でした、
　マーセラスとわしとが――そうだ、
　ちょうど鐘が一時を打っていました。
　突然、亡霊が現われる。手に元帥杖を持ったいかめしい武装姿の亡霊である。暗闇の中を静かに進む。最初に見つけたのはマーセラスである。彼ははっとして思わず飛びあがる。
マーセラス　しっ、出たぞよ、また、見ろ！
バナードー　（立ちあがり恐怖の眼を見はりながら）お崩れなさった先帝陛下そのままのお姿だ。

マーセラス　あんたは学者だ、ホレーショ君、話しかけてごらんなさい。
バナードー　先帝陛下そっくりでしょう？　どうです、ホレーショ君。
ホレーショ　（言葉もなく、呆然として立ちすくんでいたが）まったく似ている、おそろしくて息がつまりそうだ。
バナードー　言葉をかけてほしそうなご様子。
マーセラス　（ホレーショに）さあ、話しかけてごらんなさい。
ホレーショ　（勇気をだして、一歩進み出て）何者だ、きさまは？　この真夜中、
しかも、なんだその尊い軍装は、
おそれ多くも、先帝陛下ご在世中
ご着用あらせられたものではないか。言え、答えろ。
マーセラス　や、怒ったぞ。
バナードー　見ろ、行ってしまうぞ。
ホレーショ　（後を追いながら）待て、言え、言え、言わないか。
亡霊は闇の中に消える。三人は呆然として亡霊の消え去った後を見送る。
マーセラス　消えてしまった、何も答えたくないのだな。

バナードー　（ホレーショのほうをふり向いて）どうした、ホレーショ君？
なんです、そんなに震えて、まっさおな顔をして、
これでも妄想ですかな、どうです？
ホレーショ　まったくもって信じられんことだ。
しかし、こんなにまで明白な証拠を
この眼でしかと見たのだから。
マーセラス　亡くなられた陛下に似ていたでしょう？
ホレーショ　まったく陛下そのままだ。
あの甲冑も陛下のとまったく同一だ、
あれを召して野心家のノールウェー王との戦に出陣なされた。
それにあの顔つきはポーランド王との談判の最中、憤激のあまり
橇にのった敵将どもを氷の上に投げ飛ばされた時そのままの顔だ。
じつにふしぎだ。
マーセラス　しかもこの真夜中、あのようないかめしい武装姿で、
もう二度までも、われわれ歩哨の前を通ったのだ。
ホレーショ　なんと解したものか、ぼくにもはっきりわ

からんが、
しかし、これは、ひょっとすると何かこの国に
不祥なことの起きる前兆かもしれないな。
マーセラス　まあ、すわって下さい。誰でもいい、わか
っているなら教えてくれ。
毎晩このように厳重な警備を固めて
われわれ国民を苦しめるのは、いったいなんのため
だ？
毎日毎日ひっきりなしに大砲は造る。
武器弾丸はどしどし外国から買いこむ、
船大工は次からつぎに徴発して、
日曜も休まず、牛馬のように仕事にかりたてる。
いったい、夜に日をついでこんなに猛烈に
軍備を急ぐのは、なんのためなのだ？
教えてくれませんか。
ホレーショ　じゃ、話しましょう。
もっともこれはほんのうわさ話ですがね。今しがた
お姿を拝したあの先帝陛下に対して
君たちも知ってのとおり、先のノールウェー王
フォーチンブラスが傲慢不遜にも
戦をいどんできた時のことだ。なにしろ先帝ハムレッ
ト陛下といえば、
武名一世にとどろいた方だ、一撃にして
さしものフォーチンブラスを打ち倒してしまわれた。
その結果、
紋章法によって定められた厳重な契約にもとづいて
ノールウェー王はおのれの生命とともに所領地残らず
勝利者ハムレット陛下の手に渡すことになった。
もちろん陛下のほうでも同様の領地をこの戦に賭けて
おられたのだから、
反対にフォーチンブラスが勝利をえた暁には
陛下のご領地が当然彼の手に渡ったわけだ。
こうして、相互契約に明記された
条文にしたがって、ハムレット陛下は
フォーチンブラスの領地を手にお入れになった。
ところが、今その息子の、やはりフォーチンブラスと
いう名うての乱暴者が
血気の勇にはやって
無謀にも、ノールウェー国境のここかしこに、
食いしろ目あての命知らずの無法者をかり集め
何かひと騒動もくろんでいるらしい気配があるのだ。
当局のみるところでは、これはまさしく、
さきに彼の父親の失った領地を、武力に訴えて
腕ずくで奪い返そうとの魂胆にちがいない、

というのだ。今このように軍備を急ぎ、
われわれがこうして警備を固め、
国じゅう上を下への大騒ぎも、もとは
みんなそのためだと、ぼくは思うのだ。
バナードー　なるほど、そういえばそれに違いないな。
第一ぴったり符合するではないか、あの不吉な影が、
武装姿で、われわれ歩哨の傍を、しかも
この戦争とは関係の深い先帝陛下そのままの姿。
ホレーショ　（相手がひどく不安がるので、慰めるように）な
あに、そうひどく気にすることもあるまい。
昔ローマ帝国の全盛のころ、
大シーザー遭難の直前には、
ローマじゅうの墓はことごとく口を開き、さまよい出
た亡者の群れが
ローマの辻々で泣きわめいたという。
また空の星は紅蓮の焔の尾をひき、血の露が降り、
太陽の光はあやしくかすみ、海の汐の干満を
支配する月も完全に蝕けて
この世の終りかとさえ思われたということだ。
現にこの国でも、そら、あの大事件の直前
おそろしい運命の前ぶれとして、
来たるべき大凶事の前兆に、
天変地異が起って
われわれを驚かしたではないか。
ホレーショの博学な能弁に二人が耳をかたむけている時、
亡霊がふたたび現われる。ホレーショが最初に見つけて、
飛びあがる。
しっ、見ろ、またやって来た！
道をさえぎってやろう、祟るなら祟れ。（両手をひろ
げ、前に進み出て）止まれ、まぼろしめ！
声が出るなら、ものが言えるなら、
さあ、おれに言え。
お前の心をしずめ、おれの祝福ともなる
何か好いことがあるというのか　あったら
さあ、おれに言え。
この国のおそろしい運命の秘密でも知っているのか、
それがわかれば、今からでも避けられるのなら、
どうか言ってくれ！
それとも、生前奪い集めた財宝を
土の中へでも埋めておいたのか、それがあきらめられ
ずきさまら幽霊は死後までも地上をうろつきまわるとい
うが、
（この時、鶏の鳴く声が聞こえる。夜明けが近づいたのだ）

本当か？　はっきり言え――待て、言え。止めろ、マーセラス！

マーセラス　矛で殴りつけてやろうか？

ホレーショ　やれ、止まらなかったら。

バナードー　（矛を振りまわして）ここだ！

ホレーショ　（後を追いながら）ここだ！

三人が夢中で空を打っているあいだに亡霊は消え去る。三人はわれにかえって呆然と互いに顔を見合わせる。そぼくなマーセラスがいちばんさきに後悔する。

マーセラス　消え失せた！

いかん、いかん、あんな気高いものに

乱暴な真似をしたりしては。

空気同様なんの手ごたえもありゃせん、

打とうとすればするだけ、ばかをみるだけだ。

バナードー　何か言いそうにしたな、鶏が鳴きだす前に。

ホレーショ　鶏の声を聞くと、急にはっと驚いた、まるで、罪人がおそろしい呼出しを受けたときのように。

暁を告げる鶏が

のどいっぱいに朗らかな声をはりあげて

日の神を呼びますと、その夜明けの警報に

火や水、大地や空気、

いたるところをさまよい歩く霊どもが

あわてて、おのが棲家に逃げかえるということだ。

さっきの様子では、これはまんざら嘘ではないらしい。

マーセラス　鶏の声を聞くと消えてしまった。

キリストさまのご降誕をお祝いする。

季節が近づくと、暁を告げる

この鳥が一と晩じゅう鳴きつづけるという話だ。

そのため妖魔どもは一匹も姿を見せない、

夜の世界がきよめられて、星も魔力を投げず、

精霊もわるさをせず、魔女も通力を失う。

それほど、その季節は清らかで神聖なのだという。

ホレーショ　わたしもそのことは聞いている。全然信じられんこともない。

聖なる降誕祭の話のうちにおそろしく息苦しい夜が静かに明けてゆく。空がほのかに赤くそまってくる。

やっ、見たまえ、朝が赤いマントを着て

向こうの山の露をふんで、もうやってきた。

さあ、そろそろ歩哨をとこう。で、これは相談だが、

今夜のことを、どうだお伝え申そうではないか、

ハムレット殿下に。殿下なら、きっと

われわれに何も言わないあの亡霊が口をきくに違いな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

い。

賛成してくれますか？　これを申し上げるのは
殿下への真心からも、またわれわれの義務としても、
当然だと思うが。

マーセラス　ぜひそういたしましょう。これからお目に
かかれるのに
都合のいい場所をわたしが知っていますから。

（退場）

第二場

宮廷内の広い会議室、中央の大テーブルには正面に背の高い椅子――玉座――が二つ並び、テーブルの上には本や羊皮紙や白目鉛製のインク壺や砂入れや羽ペンなどが置かれている。王の登場を告げるりょうりょうたるトランペットの音が鳴りわたる。新デンマーク王クローディアス、王妃ガートルードを先頭に、顧問官らがそれに従い、さらにポローニアスと息子のレアーチーズ、ノールウェーへの特使ヴォルチマンドとコーネリアス、その他の廷臣、従者たちが威儀を正して当場する。最後に黒い喪服姿のハムレットが少しおくれて舞台に現われる。王と王妃とは正面の椅子にすわり、廷臣や従者らはその周囲に立ち並ぶ。新しい王の結婚式と戴冠式との重なる祝典後の最初の顧問官会議である。王、王妃をはじめみなはなやかに着かざり、顔は晴ればれと輝いている。この正面のきらびやかな群れと離れて、ひとりハムレットは腰をおろしている。その黒い喪服は周囲のはなやかなものと鋭い対照をなしている。冷たく無表情な顔は彼がこの公式の席にしぶしぶ出席したことを表わしている。

やがて国王クローディアスが口を開く。弁舌さわやかである。

王　尊き兄上、ハムレット王崩御あそばされて、
その記憶もまだなまなましく、おのおの
悲しみを胸につつみ、国をあげて
一つ嘆きに眉をひそむるこそ当然ではあるが、
されど、余は分別をもって自然の情とたたかい、
王の死をいたみつつも、悲しみにおぼれず、
ひたすら余がつとめを怠らぬよう日夜はげんでまいった。
ここに余のかつての姉上をば
余の妃として迎えたのもじつにそのゆえにほかならぬ。
武勇の国デンマークの王位を分つこの尊き妃を、
余はいわば、悲しみにしずむ喜びをもって、
右の眼に笑みを浮かべ、左の眼には涙をたたえ、

葬儀に喜びの叫びをあげ、婚姻に嘆きの歌を聞き、
かつ楽しみ、かつ悩みつつ
余の妻に迎え入れた。その際にはまた
諸君の賢明なる意見をも徴し、諸君においても、
進んで余に賛成してくれた。改めて、ここに感謝す
る。
さて、諸君も知られるとおり、若輩フォーチンブラ
ス、
余の力をあなどってか、あるいはおこがましくも
武勇ならぶものなき兄上の崩御によって
わが国が分裂混乱に陥るものと考えおってか、
この機に乗ぜんものとはかなき夢をいだいて、
しきりに使者を余のもとに寄せ、その昔
彼の父親が法の固い契約にもとづいて
勇壮無比の余が兄上に譲り渡した領地をば
返却せよと要求してまいった。この件に関して
余の対策を今日の会議にはかりたい。
まずこの書簡であるが、余はこれを
フォーチンブラスの叔父、現ノールウェー王にしたた
めた。
老衰して病床にある王は甥のくわだてをまだ
知らぬのだ。それゆえ、余はこの書簡によって、
ただちにその計画を中止させるよう要求した。
なんと申しても、このたびの陰謀に必要な軍隊といえ
ば、
すべて王の人民より徴発いたさねばならぬのだから
な。
さて、その使者として、コーネリアス君とヴォルチマ
ンド君。
君たち二人をノールウェー王のもとへ派遣して、
この中に詳細にしたためられた条項にもとづき、
その許された範囲内で
王と折衝する権限を与える。
では行きなさい、急ぎ使命を果たし、忠勤を示してく
れ。

コーネリアス
ヴォルチマンド　はっ、仰せまでもなく、その覚悟でお
ります。

王　よく申した。では気をつけて行け。

コーネリアス、ヴォルチマンドは敬礼して退場する。
王はレアーチーズのほうへ上機嫌な顔を向ける。
今までとは異なったくつろいだ、親しげな口調である。

それから、レアーチーズ、なんだったかな？
願いの筋があると言っていたようだが、なんだな、レ

アーチーズ？
筋道の通ったことなら、デンマーク王はなんでも望みどおりにしてやるぞ。何が望みなのだ、レアーチーズ？
お前の頼みなら、いつでも聞いてやっているではないか？
デンマーク王とお前のお父さんとの間柄はな、頭もこれほど心臓に近しくはあるまい、手もこれほど口の言うままにはならぬだろう。
なんだ、お前の望みは、レアーチーズ？
レアーチーズ　おそれながら陛下、フランスへたち戻るお許しをいただきたいのでございます。
わたしが喜んでデンマークへ帰ってまいりましたのは陛下の戴冠式に参列いたすためでございました。もはやその務めも無事果たしましたので、正直に申しますれば、ふたたびフランスへ戻りたくて矢も楯もたまらないのです。
それで、陛下のお許しをいただけましたらと存じまして。
王　お父さんは許してくれたのか、どうだ、ポローニアス？
ポローニアス　はい、伜め、さんざんせがみよりましてな、むりやり手前の許しをもぎとりました。それで手前もしぶしぶ承諾の判こをぺったり押しましてございます。
どうぞ、出発のお許しをおつかわし下さいまし。
王　よろしい、では自由に行くがいい、いとまをやるから。
せいぜい愉快に勉強してくるのだぞ。
それはそうと、ハムレット、今度は余の甥でもあり息子でもあるお前だが……
王は椅子から立ってテーブルのはしまで来て、ハムレットに言葉をかける。王は依然として上機嫌で、ハムレットに笑顔を示している。しかし、王の表情や言葉にはなんとなく不自然なものがある。
王の言葉とともに、今まで冷たく無表情だったハムレットの顔に激しい内心の感情の波が現われる。傷ついた人が傷口にふれられるのをおそれるように、ハムレットは直接王に話しかけるのをおそれているのだろうか。
彼はすわったまま横を向いて、最初の謎のような傍白を発する。それは王に対する皮肉な毒矢のようだ。
ハムレット　（傍白）血はかよっても、心はかよわぬ。

王　（ハムレットの傍白を無視して）どうしたのか、
　お前の顔にはいつも暗いかげが消えぬようだが？
ハムレット　そうでしょうとも、どうせ日陰者ですからね。
王妃　（これは少なくとも王に対する侮辱である。たまりかねて王妃が口をだす）ねえ、ハムレット、そんな暗い顔をするのをやめて、
王さまをもっとやさしい目でごらんなさいね。
いつも眼を伏せて、あの世においでになった
あなたのお父さまのことばかり考えるのはおよし。
ねえ、わかっておいでだろう、生きているものはいつ
　かはかならず死んで
あの世で永遠の命を授かるというのが当りまえだものね。
ハムレット（たのしげに）そうですね。当りまえなんでしょうね。
王妃　　それなのに、
なぜあなただけにそれが特別に見えるのでしょうね？
ハムレット（心の傷にふれられたように、急に激しく）見える？　いいえ、事実そうなのです。見えることなんか問題ではない。
お母さん、この黒い外套だけではないのですよ、
仰々しくい黒ずくめの喪服でもないのです、
わざとらしい大げさな嘆息でもありません、
それからまた眼からあふれでる涙の泉でも、
無理にゆがめてみせる顔つきでもありません、
そのほか悲嘆を表わすいろいろな扮装やしぐさ
そんなものではわたしの本質は表わせません。なるほど、
見えるというのはそういうことかもしれない、
見せびらかしの、すぐ誰にでも真似のできる身振り狂言。
わたしの心の中にあるものはそんな見世物とはちがう。
そんなものはただ悲嘆の表飾りにすぎないのです。
王　（ハムレットの激しい勢いに王妃はたじろぐ。見かねて王が割って入る）それはもちろん、やさしい、感心な
　心がけにはちがいないが、
お前がそうして亡き父の喪に服するのはな、ハムレット。
だが、考えてみなさい、お前の父も父を失ったのだ。
その父も父を失った。そして後に遺された者は
子たる者の義務として、ある期間だけはかならず
喪に服さねばならぬ。しかし、いつまでも

かたくなな哀傷におぼれることは神意に反する
強情なふるまいといわねばならん。第一、男らしくな
い。
これはまさしく神に逆らう意志の現われであり、
心に信仰なく、いささかの忍耐もなく、
思慮分別をまったくわきまえぬ証拠なのだ。
それが必然だということは誰でも知っていることだ
し、
誰の耳目にもふれるものと同様、じつにありふれたこ
とではないか。
それをなぜ駄々っ子のように
悲しんでばかりいるのだ？　よせよせ、みっともない
ぞ。
そうしたふるまいこそ、天にそむき、死者にそむき、
人情にそむき、
そのうえ、理性の教えにもとるというものだ。
理性は常に父の死ということを説いているではない
か。
人間の最初の死からこの方いつも
叫びつづけているではないか、「これが必然だ」と。
どうか無益な嘆きを振り捨てて、
余をまことの父と思ってくれ。余はこの場で宣言して
もよいぞ、
お前こそ余の王位を継ぐべき人だ、
そして余はもっとも慈悲深い父親におとらぬ
深い愛情をもってお前を愛しておるのだと。
それだのに、お前はふたたびウィッテンバーグの大学
へ
帰りたいと言っているそうだが、
それはどうあっても許すわけにはいかぬ。
どうか頼むから、この土地にのこって
余の重臣として、余の身内、余の子として
余の*暖い膝下にとどまってくれ。
（ハムレットは無表情におし黙っている）
王妃　母の願いもきいておくれ、ハムレットや、
ウィッテンバーグなどへ行かずに、どうかわたしたち
のそばにいておくれ。
ハムレット（ものうげに）せいぜい御心にそうことに
いたしましょう。
王　よしよし、よく素直に承知してくれた。
余とおなじつもりでここで暮らすがいい。行こう、ガ
ートルード、
ハムレットが喜んで同意してくれたので
わしの心は晴ればれとした。さあ、この喜びのしるし

に

これから祝杯をあげよう。
今日デンマーク王が杯をかたむけるたびごとに
祝砲を打ちあげ、王の乾杯を大空にこだまさせ
大地も裂けんばかり鳴りひびかそう。さあ、来い。

奏楽のうちに一同にぎやかに退場する。ひとり残されたハムレットはじっと動かない。今までの氷のような無表情の仮面が消え、その顔に悲しみと嫌悪と孤独とが現われる。

ハムレット　ああ*、いっそ汚れたこの肉体が溶けて
崩れて、露となって消えてしまえばいいに。
せめて全能の神の掟が許してくれるなら、
いっそ自殺でもして。ああ、ああ、
退屈で、愚劣で、平凡で、無意味で、
この世のいとなみがどうにもおれには我慢ができぬのだ。
いやなことだ、いやなことだ、ここは雑草の生い茂る庭だ、
荒れはてて、あさましい、きたならしいものばかりがはびこっている。そのうえ、ああ、こともあろうに、
亡くなられてから二た月、いや二た月もたってはいない、
あんなにすぐれた王が、今の王にくらべれば、それこそ
*ハイペリオンとサチールほどにも違う、あれほどお母さんを愛していられたのに、
空をゆく風がお母さんの面に強くあたるのをさえお許しにならなかったのに。——ああ、なんということだ、
いっそ忘れられるものなら。片時も離れず父に寄り添うて
その愛情にはぐくまれて、母の情愛は年とともにつのっていくように見えた、それが、わずか一と月もたたぬうちに、
ああ、もう考えまい。——弱きもの、お前を女という！
たった一と月、その靴もまだ古びぬのに、あれを穿いて、
お父さんの遺骸につき添って行かれたのだ、
あんなに泣きぬれて。その母が、そうだ、その母が、
ああ、道理をわきまえぬ獣さえ、いましばらくは悲しんだであろうに、——叔父と結婚したのだ。
父の弟ではあるが、似ても似つかぬ、
おれと*ヘラクレスとが違うほども違う、
——まだ一と月もたたぬ間に、あの空涙で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb